

《第479回（2021年2月4日）子どもの本の読書会記録》 参加者：5人 文書参加：2人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア4階集会室

『シェルパのポルパ エベレストにのぼる』石川 直樹／文、梨木 羊／絵 岩波書店

シェルパとは、ネパールの少数民族のひとつ。この民族の人たちが、ヒマラヤ登山者の荷物運搬や、ベースキャンプの設営などの仕事に従事してきたことから、ヒマラヤ登山をサポートする現地ガイドのこともシェルパと呼ばれています。

今回の絵本の主人公は、シェルパ族の男の子、ポルパ。毎日荷物運びの仕事で、エベレストまでの道を行ったり来たりしています。しかし半人前のポルパが行けるのは、氷河の入口まで。いつかエベレストのてっぺんに登りたいと、山へのあこがれを募らせていました。そんなある日、ポルパは、ベテランシェルパのテンジンおじさんに足腰の強さを認められ、ヒマラヤに登るための特訓が始まります。春がきて、ポルパはいよいよ、シェルパとしてエベレストの山頂を目指すのです。

ヒマラヤの雄大な山々や自然、登山者を襲う過酷な天候、動物たちと共に生きるシェルパ族の暮らしなどが、てらいのない文章とタッチで描かれているこの絵本。ポルパの純粋な気持ちが、絵柄や言葉ひとつひとつから伝わってきます。

次に、読書会に参加された方々の感想を紹介します。

●自分も登山を体験している気分を味わえた。ポルパが登山中、飛ぶ鳥を見て励まされるシーンでは、自分がしんどい時の経験を思い出して共感できた。一文一文がシンプルで、何度も読み返してみると、いろんな意味にとれて深みを感じる。山に登ることは、シェルパにとって仕事でもある。小さいころから大きい山を見て過ごしたポルパの、エベレストに登りたいというピュアな思いが伝わった。

●ポルパの純粋な思いがひしひしと伝わってきた。山頂にたどり着いたときの、悲しくないのに涙がぼろりと落ちるというラストシーンが良い。ポルパ自身の新しい世界への第一歩だと感じた。シェルパのサポートがあるからこそ、多くの登山の記録が出るんだろうな。見返しにある地図も良かった。シリーズを追いかけて読んでみたいと思える本。

●努力するポルパの健気さがいい。主人公を鍛えるのは父の役割であることが多いけど、ここではテンジンおじさんがその役割。お父さんはいないのかな？ヒマラヤの風景や、自然の厳しさを、上手く絵本に落とし込んでいる。縦開きになるところも、エベレストの高さを感じられて良い。ポルパが成長し、認められ、そこでしか見られない景色に出会うことができたのは、本当によかったなと感じた。

●ポルパは、自然で、素直で、素朴なこども。ほっぺが赤いのが印象的。こんな純粋な子がいるんだなと思った。登山は、自然と向き合うことができる。生きているという実感が持て、感性を豊かにしてくれる。自分も登山の経験があるので、ポルパが山頂で涙を流したときの気持ちが分かった。ずっとあこがれていた登山が実現できてよかった。

●シェルパのことは知っていたが、登山者に先行してキャンプを設営したり、氷河にはしごやロープを準備したりしていることは初めて知った。ニュースで見る登山者の笑顔の陰には、ポルパのようなシェルパがたくさんいるということ、これから感じるだろう。シェルパが背負っている籠は、日本の背負子や籠と同じように見えるが、おでこで支えているのはなぜだろう？安定するから？

●穏やかな村の風景を、やさしいタッチの絵で見られるのが楽しい。日本とは家の造りも、来ている服も違う。ポルパは何歳くらいかな？小学生くらいかな？と想像して読んだ。重たい荷物を苦にせず働いていてえらいし、エベレスト登山にも怯まない心の強さを持っていることも分かる。山や村の生活が大好きなポルパの気持ちも伝わる。

次回 3月11日（木）10:00～11:30 オーテピア4階集会室

□『科学と科学者のはなし 寺田寅彦エッセイ集』

寺田 寅彦/著、池内 了/編 岩波書店